

## 5 『うつほ物語』 俊蔭をめぐって

今津 勝紀

### 1. はじめに

今日取り上げるのは『うつほ物語』。漢字で書くと「宇津保」と書きます。全部で二十巻からなる大部なものです。これは今から千年ぐらい昔に書かれた物語です。源氏物語よりも古い物語で、平安時代の物語文学の中では一番古い部類に入るものです。テキストは、岩波書店の日本古典文学体系本をもとにして、所々を小学館の日本古典文学全集本により補って読みやすくしています。

平安時代の文学では、源氏物語が有名で、『うつほ物語』は、その陰に隠れたマイナーな物語なのですが、大変おもしろいものです。源氏物語が上級貴族や天皇といった、頂点の世界の話であるのに対し、『うつほ物語』が扱うのは、もうちょっと下のクラスの貴族です。もちろん平安文学では、一般庶民は主役にはなりにくくて、貴族の生活が中心なのですが、最上級の貴族だけではなくて、中級の貴族もたくさんでできます。そのため歴史学では古くから注目されていた物語です。

今日、お話しするのは、冒頭の俊蔭という部分ですが、この俊蔭娘とその子について取り上げてみたいと思います。ちなみに、俊蔭という人物は幼い頃から学問に秀でており、十六歳のときに遣唐使船で唐に渡るのですが、その際、暴風雨に遭って、波斯国（ペルシャ）に漂着します。俊蔭は、そこから西へと行き、仙人から琴を習い、三十本の秘琴を得ます。なかでも、なん風・はし風と呼ばれる二本の琴は、秘琴の中の秘琴で、これを弾くと天変地異を引き起こすものでした。

俊蔭は、二十三年目にして日本に戻り、結婚して女の子が生まれます。それが俊蔭娘です。俊蔭は、持ち帰った琴を天皇に献上し、天皇の仰せにより琴を弾くと宮の屋根が抜け、真夏に雪が降るといった奇瑞を起こします。そして、琴の名手として知られるようになるのですが、俊蔭は官位を返上し、屋敷に籠もって、娘に秘伝の琴を伝授します。俊蔭娘は大変、美しく、求婚者も多いのですが、それらをすべて断わり、ひたすら琴を伝授しました。そうして、娘が十五歳になった時、ついに俊蔭とその妻が死んでしまいます。俊蔭は死際に、娘に対して、なん風・はし風の二琴は幸・不幸の極まった時に弾くようにと遺言します。娘は、その後、乳母とも死別して、貧窮のうちに孤独で過ごすこととなります。

今日の主人公は、この俊蔭娘です。

## 2. 俊蔭娘と若子君－古代の恋愛－

ひとり孤独に過ごす俊蔭娘は、太政大臣の四男、若子君と出会います。

【1】かくて、八月、中の十日ばかりに、時の太政大臣御願有りて、賀茂に詣で給ヒけるを、舞人、陪従、例の作法なれば、いといかめしうて、この俊蔭の家の前より詣で給ふ。舞人、陪従いかめしう、御前数知らず、過ぎ給フを見ると、毀れたる葺のもとに、立ち寄りて見るに、遊び人、御車など過ぎて、立ち遅れて、これも前追ひて、年廿ばかりの男、又十五歳斗にて、玉光り輝ク髻髪子の御馬副多くてわたり給ふ。髻髪子は、大臣殿の御四郎にあたり給フ。父おとゞ限りなくかなしうし給ヒて、片時御眼はなち給はぬ御子なりけり。若子君となむ聞こえける。

ここには、「かくて、八月、中の十日ばかりに、時の太政大臣御願有りて、賀茂に詣で給ヒけるを、舞人、陪従、例の作法なれば、いといかめしうて、この俊蔭の家の前より詣で給ふ」とあります。八月の中旬、「旬」っていうのは十日間のことで、初旬・中旬・下旬とありますが、八月のちょうど真ん中の十日間ですよ。これは太陽暦の新暦ではなく、太陰暦の旧暦ですが、旧暦の数え方では一、二、三月が春で、四、五、六月が夏で、七、八、九月が秋で、十、十一、十二月が冬になります。今で言うと、二月の梅が咲く頃の旧正月から始まります。ですので、八月の中旬っていうのは秋なのです。旧暦の秋の真っ盛りの八月の中旬に、時の太政大臣が、願をかけて賀茂社に詣でる。賀茂社というのは、京都の上賀茂・下賀茂がありますが、その神社です。その行列が俊蔭の家の前を過ぎてゆく描写です。

太政大臣は最上級の貴族ですので、舞人や陪従をずらずらと従えた行列になるわけです。舞人は、神様に捧げる舞を捧げる人。陪従は、太政大臣に陪従する人で、貴人に付き従う者です。恐らく、楽人とかも含むのだらうと思いますが、これが「例の作法」として、つまり、いつもの通りに、太政大臣が行列をなして、「いといかめしうて、この俊蔭の家の前」を通り過ぎるのですが、「舞人、陪従いかめしう、御前数知らず、」すごい数であった。

そして、俊蔭娘は、「過ぎ給フを見ると、毀れたる葺のもとに、立ち寄りて見るに」というのは、そういう行列が通るから、どんなもんだらうと思ってそれを見てみようと思った。どこから見たかっていうと、毀れたる葺、毀れたるっていうのは壊れたるっていうのと同じです。葺っていう跳ね上げ式の戸があるのですが、その陰から見ていた。しかし、壊れたるっていう風にあるので、俊蔭娘の住まいは、手入れされていない、荒れた家であることがわかります。

そこから、立ち寄りて見るに、「遊び人、御車など過ぎて」、そして「立ち遅れて、これも前追ひて」、それにちょっと遅れて、「年廿ばかりの男、又十五歳斗にて、玉光り輝

ク髻髪子の御馬副多くてわたり給ふ」。二十歳ぐらいの男と、あと十五歳ぐらいの子がその後につき従った。これが玉光り輝ク髻髪子とありますように、すごく、かっこいいのですね。玉光る美少年です。

この髻髪子は、太政大臣の「御四郎にあたり給フ」、つまり四男でお坊ちゃんなわけです。ですので、「父おとゞ限りなくかなしうし給ヒて、片時も御眼はなち給はぬ御子なりけり」とあります。太政大臣は、この子をたいへん可愛がっていて、片時も目を離さない、そういう子であった。「若子君となむ聞えける」というのは、若様です。ちなみに十五歳というのは、成人式にあたる元服を迎える寸前くらいです。正式な貴族社会の構成員になる寸前の状態だと思います。

そして、続いて次のようにあります。

【2】この家の垣穂より、いとめでたく色清らなる尾花、折れかへり招く。さきに立給へる人「あやしく招くところかな」とて「吹く風のまねくなるべし花すゝきわレよぶ人の袖と見つるは」とて、わたり給フ。わかコ君「みる人の招くなるらん花すゝき我袖ぞとはいはぬものから」とて、たちより給ヒて、折り給フに、この女の見ゆ。「あやしく、めでたき人かな。心ぼそげなる住居するかな」とみ給フに、うち歩み入るうしろで、こともなし。若子君「哀」と見給へど、ひとり行く道にしあらねば、強ヒて過ぎ給ヒぬ。

この荒れた家の垣穂から、いとめでたく色清らかなる尾花が、こちらを招くようにそよいでいる。前を行く男君が不思議に、入ってみたいくなるようなところだなあと、と言って、「吹く風のまねくなるべし花すゝきわレよぶ人の袖と見つるは」という歌を詠む。ちなみに、平安貴族の歌は、コミュニケーションツールでもあつて、みなさんが、携帯でメール交わすのと同じようなものです。

そこで若子君が、垣根に「たちより給ヒて」、尾花を「折り給フに、この女の見ゆ」ということになります。この女が俊蔭娘です。その女性について、「あやしく、めでたき人かな」とは、不思議なくらい綺麗だなあ、しかし「心ぼそげなる住居するかな」と思って見ていると、その女性は体を翻して中に入ってしまうのですが、「うち歩み入るうしろで、こともなし」というように、その後ろ姿がこれまた綺麗で、それをしみじみと思っていたのだが、「ひとり行く道にしあらねば、強ヒて過ぎ給ヒぬ」、寄らずに素通りしたわけです。

で、次にまいります。

【3】かくて、御社にまで著キ給ヒて、神楽を奉り給フに、若子君「昼見エつる人何ならん。いかでみん。」とおぼして、暗くて帰り給フに、人にたちオくれで、皆人渡りはてぬるに、若子君、家の秋の空、静かなるに、見廻りてみ給へば、野藪のごと、恐しげなる物から、心有りし人の、急ぐことなく、心にいれて作りし所なれば、木立よりはじめて、水の流れたるさま、草木のすがたなど、ヲかしく見所あり。蓬葎のなかより、秋の花はつかに咲き出でて、

池ひろきに、月面白くうつれり。おそろしきことおぼえず、おもしろき所を分け入りて見給フ。秋風、河原風にまじりて、はやく、草むらに虫の声みだれてきこゆ。月隈なうあはれなり。人の声きこえず、かゝる所にも住むらむ人を思ひやりて、独言に、「虫だにもあまた声せぬ浅茅生にひとり住むらん人をこそ思へ」とて、深き草を分け入り給ヒて、屋のもとに立ちより給へれど、人も見えず。たゞ薄のみ、いとおもしろくて招く。隈なう見ゆれば、なほ近く寄り給ふ。

「かくて、御社にまで著キ給ヒて、神楽を奉り給フに」、こうして賀茂神社まで行って、神楽を奉納したのですが、若子君は、「昼見エつる人何ならん。いかでみん」、昼間見た人が気になるなあ、もういっぺん行ってみたいなあ、と思ったわけです。そこで、「暗くて帰り給フに、人にたちオくれて、皆人渡りはてぬるに、若子君、カノ家の秋の空、静かなるに、見廻りてみ給へば」云々というように、暗くなって帰るときに、「人にたちオくれて、皆人渡りはてぬる」、つまり、わざと遅れて、みんなを先に行かせました。そうして、「若子君、カノ家の秋の空、静かなるに、見廻りてみ給へば」というように、邸内に入っていったわけです。荒れてはいるが、趣のある邸内の描写の詳細は省略しますが、月明かりで「隈なう見ゆれば、なほ近くより給ふ」というように、さらに中へと入ってゆきました。

すると、

- 【4】東面の格子、一間あげて、琴をみそかに弾く人有り。立ち寄り給へば、入りぬ。「飽かなくにまだきも月の」など、ノ給ヒテ、簀子ノ端ニ、居給ヒテ、「カハル住居シ給フハ誰ぞ。名乗し給へ」などの給へど、答もせず。うち暗なれば、入りにし方も見えず、月やう々々いりて、「立ちよると見る々々月の入りぬれば影をたのみし人ぞ侘しき」、又、「入りぬれば影も残らぬ山の端に宿まどはしてなげく旅人」など、の給ヒて、彼の人の入りにし方に入れば、塗籠あり。そこに居て、物の給へど、ヲさ々々答もせず。若子君、「あな、恐し。音し給へ」との給フ。「おほろけにては、かく参り来なむや」などの給へば、けはひなつかしう、童にもあれば、すこし侮らはしくやおぼえけん、「かげろふの有ルかなきかにほのめきてあるは有りとも思はざらなむ」と、ほのかにいふ声、いみじう、ヲかしう聞ゆ。いとゞ思ひまさりて「まことは、かくて、あはれなる住ひ、などて、し給フぞ。誰が御ゾウにかものし給フ」との給へば、女「いさや、なにかは聞えさせん。かうあさましき住ひし侍れば、立ち寄り訪ふべき人もなきに、あやしくおぼえずなむ」と聞ゆ。君「疎きより、としもいふなれば、覚束なきコソ頼もしかなれ。いと哀に見え給へれば、え罷りすぎざりつるを、思ふもしるくなむ。親、物し給はざなれば、いかに心ぼそく覚さるらん。誰とか聞えし」などの給フ。答「誰と人ニ知られざりし人なれば、聞えさすとも、え知り給はじ」とて、前なる琴を、いと

ほのかにかき鳴らして居たれば、この君「いとあやしくめでたし」と聞きみ給へり。夜ひと夜、物語し給ヒて、いかゞありけん、そこに止まり給ヒぬ。

「東面の格子、一間あげて、琴をみそかに弾く人」がいた。建物の東側の蔀を一間上げて、琴を弾いている人がいた。そこで、若子君が「立ち寄り給へば」、その女は奥へ入ってしまった。ここからは少し省略してゆきますが、「カゝル住居シ給フハ誰ぞ。名乗し給へ」、あなたは一体誰ですか、と問うわけです。しかし返事がない。若子君は重ねて問うのですが、やはり返事がない。若子君は、「あな、恐し。音し給へ」、気味が悪いので何か話して下さいと哀願するのですが、その「けはひなつかしう、童にもあれば、すこし侮らはしくやおぼえけん」、親しみやすそうで、元服前の少年でもあり、気が置けないと思ったのであろうか、「かげろふの有ルかなきかにほのめきてあるは有りとも思はざらなむ」、かげろうのように儂いわたしですので、人数に思ってくださいまするな、とかすかな声で答えた。

その声が若子君には、優雅に聞こえた。それで、若子君は一層想いが募っていくわけです。それで、「まことは、かくて、あはれなる住ひ、などて、し給フぞ。誰が御族にかものし給フ」と、どちらの一族の方なんでしょうか、という風に尋ねる。ところが女の方は、「いさや、なにかは聞えさせん。かうあさましき住ひし侍れば、立ち寄り訪ふべき人もなきに、あやしくおぼえずなむ」ということで、どうしてお答えできましようか。こんな貧しい暮らしをしていますので、誰も立ち寄って下さる方もありません。あなた様がここへ来ることは思いもよらぬことでした、と申し上げる。そう簡単には仲良くなれないのですね。

そして、若子君は、「疎きよりとしもいふなれば、覚束なきコソ頼もしかなれ。いと哀に見え給へれば、え罷りすぎざりつるを、思ふもしるくなむ。親ものし給はざなれば、いかに心ぼそく覚さるらん。誰とか聞えし」、最初は疎遠な間柄ですが、疎遠なところから親しくなっていくものですので、はっきり判らないほうが頼もしいのです。通りかかった時に、非常に心が魅かれ、ほっとくことができませんでした。そして、あなたは想像していた通りの方でした。もしお父上などがご存命でないのならば、どんなに心細く思われるでしょう。あなたのお父さんの名前は何ですか、と長々と口説くわけです。

それに対して俊蔭娘は、「誰と人に知られざりし人なれば、聞えさすとも、え知り給はじ」と、名前を言わなかった。それで、「前なる琴を、いとほのかにかき鳴らして居たれば」、若子君は「いとあやしくめでたし」と「聞きみ給へり」ですので、じっとその琴の音を聞きながら座っていた。それで、「夜ひと夜、物語し給ヒて、いかゞありけん、そこに止まり給ヒぬ」。一晩中、どういうことがあったのか、そこにとどまった。

名乗りの部分は省略しますが、「夜ひと夜、物語し給ヒて」の内容は、

- 【5】 深き契を、夜ひと夜、心のゆく限り、し明し給フも、逢ひ難からむことを、今より、いみじう、悲しう覚さるゝほどに、明くなれば、さても有ルまじう、おぼし騒ぐらんといみじければ、「なホ如何すべき。今日ばかりは、なホか

うてもと思へど、同じ所にてだに、片時、才前ならぬ所には据エ給はず。あからさまの御ともにも、はづし給はず。昨日、心地のあしく覚えしかば、ま井るまじかりしを、せちにの給ヒしかば、そもかうこゝにま井り来べかりければこそと、今なむ思ひしらるゝ。さらに心にては、夢にてもおろかなるまじけれど、参り来むことのわりなかるべきこと」と、の給へば、女、「秋風の吹クをも歎く浅茅生にいまはと枯れんヲりをこそ思へ」とほのかにいへば、ふたしへにいとホしく、あはれなる事を思ひ入りて、「葉ずゑこそ秋をも知らめ根を深みそれみち芝のいつか忘レん。吾が仏、オろかなリトなオぼしそ。さりとも、かくてやむべきにもあらず。たゞつゝましきほどばかりぞ」との給ヒて、起きて出で給フに、なほいみじう、かなしう覚さるれば、単衣の袖を顔におしあてて、とばかり泣き入りて、かくの給ふ。「宿思ふ我いづるだにあるものを涙さへなどとまらざるらん」との給へば、女うち泣きて、「見る人ノ名残有リげもみえぬ世を何と忍ぶる涙なるらん」といふさまも、いと心苦しけれど、殿のことも、いとヲしければ、返す返す契りオきて出デ給フに、殿のうちをだに、人あまたしてこそありき給へ、たゞひとところ帰り給フに、いづれの道とも知り給はぬうちに、哀なる人を見捨てつるに、吾カ人にもあらぬ心ちして、見廻らして、辻にたち給へり。

とあるように、「深き契を、夜一よ心のゆく限り、し明し給フ」。二人は結ばれるわけです。ちなみに、当時、年齢は数えによるのですが、若子君は「十五歳斗にて、王光り輝ク髻髪子」でした。俊蔭娘も十五歳のときに父母が亡くなっていて、物語の年立てでいくと一年ぐらい経っているのですが、若子君より一歳ぐらい年上になると思われます。数えで十五歳、十六歳ぐらいの若いカップルですね。年下の男の子が、女の子に猛烈にアタックして一晩過ごしたということになります。ちなみに古代では、婚姻開始年齢というのは戸令という法律（聴婚嫁条）で決められていまして、男性は十五歳、女性の場合は十三歳から結婚が許されていました。

若子君は俊蔭娘との忘れがたい一夜を過ごすのですが、無断外泊したため、父母のことも気にかかります。父母と俊蔭娘の「ふたしへにいとホしく、あはれなる事を思ひ入りて」、「宿思ふ、我いづるだに、あるものを、涙さへなど、とまらざるらん」と詠むのですが、「返す返す契りオきて出デ給フ」として、女の許を去ります。「哀なる人を見捨てつるに、吾カ人にもあらぬ心ちして、見廻らして、辻にたち給へり」とは、あわれな人を見捨ててきたので、正気を失い呆然として、あたりを見回しながら、道の辻にぼつんとお立ちになっていたとなります。

### 3. 俊蔭娘の出産 —古代の出産—

次行きましょう。若子君の実家は大騒動になっていまして、一族郎党が京の町中ずっ

と探し回り、ついに若子君は見つけ出されますが、父母の監視下に置かれて、外に出してもらえなくなってしまいます。それで、会えなくなった俊蔭娘のことを思い悩むのですが、若子君が去った俊蔭娘も次のように思い悩みます。

【6】かくて、かの女君、夢の事有りしに、たゞならずなりにけり。それをも知らず、父母のみ恋ひしく、ならはぬ住ひの侘しく、おぼつかなき事、語らひオキ給ヒしことを、草木のいろかはり、木の葉の散りはつるまゝに、涙を落とし、眺めわたる。夕暮に雷光のするを見て、「いなづまの影をもよそに見るものを何にたとへんわが思ふ人」などいへど、誰かは答へん。若子君、かくて歎く夕ぐれに、風はげしく虫の声みだるゝを聞きて「あはれ、わが見しところの河原風、いかならん」と思ひやりて、「風吹けば声ふりたつる虫の音に我も荒れたる宿をこそ思へ」など、眺めぬほどに、十月ばかりになりぬ。しぐるゝ空にも、人知れぬ袖によそへられて、ながむるをだにと、空にのみ向へるに、鶴いと哀にうち鳴きて渡る。この君、これを聞きて、まして悲しさまさりて、「たづが音にいとゞも落つる涙かな同じ河辺の人を見しヨリ、あはれ」とひとりごちて、「いかならん世に、今ひとたび見ん」と思へど、夢の通ひ路だになし。月日の経るまゝに、逢期なき音のみ泣かれまさりて、かの京極にも風の荒く、霜、雪の降りつむまゝに、長き夜スガラ、よろづの事を思ひあかして、袖の凍れるを見て、「わが袖のとけぬ氷をみるときぞ結びし人も有り知らるゝ」など思ふほどに、年かへりて春になりぬ。かの若子君、出で給フとて、オし折り給ヒし桂の木の萌えいでたるをみて、「忘れじと契りし枝はもえにけりたのめし人ぞこの芽ならまし」と思ひわたる。

「かくて、かの女君」、これはあの俊蔭娘です。「女君、夢の事有りしに、たゞならずなりにけり。それをも知らず、父母のみこひしく、ならはぬ住ひの侘しく」云々。これどういうことかという、その俊蔭娘の方は、夢の事があって、「たゞならずなりにけり」というのは、通常じゃなくなったわけです。だけれども、そのこともわからずに、亡くなってしまった父母だけを恋しく思い、この侘しい住まいをずっと嘆いていた。そして、若子君とあの夜約束したことなどを思いながら、草木の色の移ろい、木の葉が散り果てるままに、涙を流して嘆き沈んでいたわけです。

そして、

【7】月日へて、子生むべきほどになるまで、見知らでゐたるに、九の月といふに、この使ふ姫、物食セナドニ前に出できて、うち傾きて見ていふやう、「あやしく、などか御さまの例ならずおはします。もし人も近く御物語やし給ヒシ」。いラへ「いさや、近きまゝに、蓬葎とこそは語らへ」。姫、「あなさがな。戯にも、の給ふべきことにあらず。姫には、な隠し給ヒそ。姫は早うより、然は見奉れど、然も聞えざりつるなり。御かたきをば知り奉らじ。いつよりか御汚は止み給ヒし。いと近げになり給フめるを、の給へ。いかでか御設せざ

らむ」。いらへ「あやしくもいふかな。われはいかゞはある。例することは九月ばかりよりせぬ。されど、なホ然有ルにこそあらめとて、ともかくも覚えぬ」といへば、嫗、「さらば、この月たゞむ月にこそおはしますなれ。あないみじや。かゝる御身を持ち給ヒて、今まで知り給はざりけるはかなさ。嫗亡くなり侍りなば、いかゞなり給はん。あが君の御ためにこそ、拙なき身の命もヲしけれ」といふにぞ、わが御身はかゝる事有りけり、と思ふにぞ、いとゞいみじき心ちして、はづかしくさへ有りて泣くをみて、「よし、いかゞはせむ。嫗、知り侍らば、物なおぼしそ。野山をわけても御をば仕うまつらん。子の御宝となり給はんとも知らず。御身々とだになり給ヒなば、嫗、負ヒかづきテも仕ウまつらん。アガ仏の御ゆかりには骨、舍利のなかよりも、あまき乳房は出で来なむ。白き髪筋も、銀、黄金となりなん。あぢきなし、かなしともな覚しそ。唯御手をかいすまして、神仏に『平らかに御身々となし給へ』と申シ給へ。又、嫗の命を念じ給へ」と泣く々々いひて、嫗、思ひまはして、片田舎に子供ナド有りければ、それがもとにいきて、君にはともかくもいはで、かの折に使ふべきものども求めて、さりげなくて、「この比はいかでかおはしましつる。哀れ、いかにせむ。殿の内にとかくうちして、使ふべきものはありや」といへば、君、「いさ、いかなるものをか、さはする」。嫗、「何にまれ、々々、あらん物を、いかにも、いかにもしなして、おほくはこの御ために物せむかし」といへば、いと美しげに調じたる唐鞍を取り出だして「これは何にすべき物ぞ」とて見すれば、「さハ、これして、いとよう仕うまつるべかめり。又物はなしや」と問へば、「見えざめり」といふ。嫗、是をとりもちて、要じ給フべき所所に持ていきて、おほくになして、絹・布など買ヒて、その設す。ものなど食はするをも僅づかにして、このことをのみ心に思ヒ感ひありク。女君は、草の生ひ凝りて、家のあばるゝまゝに、夜昼涙を流して、子生まんことも思はである程に、嫗、よろづにし歩き、そのヲりの事みなしいでつ。

先に「たゞならずなりにけり」とあったのですが、俊蔭娘は、ちょっと抜けているのかもしれませんが、あまり、よくわかってなかったのですね。要するに、妊娠していたわけですが、「月日へて、子生むべきホドになるまで、見知らでゐた」。若子君と夢の一夜があつて、九ヶ月経った。ついにそろそろ子どもを産む時期になっているのだけでも、それもわからずにいたのですね。

一応、俊蔭娘には仕えている嫗、老女がいるわけですが、「九の月といふに、この使ふ嫗、物食セナドニ前に出できて、うち傾きて見ていふやう」、これが身の回りの世話をし食事差上げようとしてやってきた。それで、「あやしく、などか御さまの例ならずおはします。もし人も近く御物語やし給ヒシ」という風に聞いた。これはどういうことかという、不思議ですなあ、どうしてお体の調子がいつもと同じでは

ないのでしょうか、ひょっとしてもしや誰かと物語なぞなさいましたか、聞いたわけです。物語するというのは、要するに性交です。

ところがそれに対する答えが、「いサや、近きまゝに、蓬葎とこそは語らへ」、ということ、そこらに生えている雑草とは喋ったことがあるけれども、誰とも会ったことはありません、とそういう風に言った。それに対して老女は、「あな、さがな。戯にも、の給ふべきことにあらず。嫗には、な隠し給ヒそ。「おうなは早うより、然は見奉れど、然もエ聞えざりつるなり。よし御かたきをば知り奉らじ。いつよりか御汚は止み給ヒし。いと近げになり給フめるを、の給へ。いかでか御設せざらむ」と問い詰めます。まあ、とんでもないこと、そんな 蓬や葎としか喋っていないなんていうことはありえないでしょう。冗談にもそんなことは仰るものではありません。わたしは全てわかっているのです。わたしには何もお隠しなさいますな。前々から妊娠しているだろうとお見受けしておりました。それで何も言わなかったんですよ。相手のことも聞きますまい。もう相手のことをいちいち詮索しません。「御汚」とは月経のことです。いつから、月経が止まっているのですか。もう、そろそろ子どもが産まれるじゃありませんか。その用意をしなければいけません。

で、女君は答えます。「あやしくもいふかな」、何を訳のわかんないことを言っているのですか。「われはいかゞはある。例することは九月ばかりよりせぬ。されど、なホ然有ルにこそあらめとて、ともかくも覚えぬ」。わたしがどうしたというのですか。月経は、この九月からずっと止まっています。だけど、そういうこともあるものだと思っていたから気にも留めませんでした。そうすると、嫗が、それじゃあ「さらば、この月たゝむ月にこそおはしますなれ」、今月か来月にもう出産じゃないですか。「あないみじや。」まあ大変なこと。「かゝる御身を持ち給ヒて、今まで知り給はざりけるはかなさヨ。」こんな身重になっても、今までわからなかったとはなんと情けないことですか。「嫗亡くなり侍りなば、いかゞなり給はん。あが君の御ためにこそ、拙なき身の命もヲしけれ」、わたしが亡くなってしまったらどうするつもりなの、大切なあなたのためにも、わたしのつまらない命も惜しゅうはございます、と言われたので、俊蔭娘は、「わが御身はかゝる事有りけり、と思うにぞ、いとゞいみじき心ちして、恥づかしくさへ有りて泣く」、それでは自分は妊娠してたんだ、と思うと、一層悲しい気持ちになって、恥づかしくさえ思えて、泣いてしまった。

それで、老女が「よし、いかゞはせむ。嫗知り侍ルは、物なおぼしそ。野山をわけても御をば仕うまつらん。子の御宝となり給はんとも知らず。御身々とだになり給ヒなば、嫗、オヒかづきても仕ウまつらん。アガ仏の御ゆかりには骨、舎利のなかよりも、あまき乳房は出で来なむ。「白き髪筋も、銀、黄金となりなん。あぢきなし、かなしともな覚しそ。唯御手をかいすまして、神仏に『平らかに御身々となし給へ』と申シ給へ。又、嫗の命を念じ給へ」と泣く々々いひて」、こうなったらもうしょうがないじゃないですか。わたしが知ったからには心配しなさんな。「物なおぼしそ。」心配するな、と。

野山を分け入る苦勞をして、野山に分け入っても、あなたの出産をお助けしましょう。子どもというのは、家の宝となるかもわかりません。「御身々」ってのは身と身、ふたつということで、無事に産まれたならば、ということになります。無事に身二つになられたならば、「御身々とだになり給ヒなば」、わたしがその子を背負ってでも大切にお育てしましょう。大切なあなた様の子どもですから、骨、舍利の中からも甘いお乳が出てくるでしょう。わたくしの白髪も、銀、黄金となって暮らしの糧となるでしょう。「あぢきなし、かなしともな覚しそ」、どうしようもない、悲しいなどはお思いなさいませ。ただ手を清めて、「御手をかいすまして」、清めて、神仏に祈りなさい。平穩に、安産させてください、とお祈りなさいませ。また、このわたしの寿命をも、祈ってくださいませ、と言った。

しかし、「女君は、草の生ひ凝りて、家のあばるゝまゝに、夜昼涙を流して、子生まんことも思はである程に、嫗よろづにし歩いて、そのヲリの事みなしいでつ」。俊蔭娘は、草が生い茂り荒れ果てた家の中で、夜となく昼となく、ずっと涙を流して、自分が子どもを産むということも思わずに、ぼーっと日を過ごしていたが、この嫗が「よろづにしありきて」、出産の準備を整えました。

【8】かくて、六月六日に子生まるべくなりぬ。気色ばみて悩めば、嫗、肝心を感はして「たヒらかに」と申しまどふほどに、殊に悩むこともなくて、玉光り輝く男を生みつ。生まれ落つる、すなはち、嫗、己が布の懷に抱きて、母にヲさ々々見せず。只乳のまするヲりばかり率てきて、オひかづき養ふ。女君は、ことに悩むところなくて起き居たり。暑き頃なれば、貧しき人のためにはいとよし。「これは大福德におはしなむ、かく暖かげにつきておはしますハ」と誇りありク。

そうして、六月六日に、いよいよ子どもが生まれそうになった。「気色ばみて悩めば、嫗、肝心を感はして『たヒらかに』と申しまどふほどに、殊に悩むこともなくて、玉光り輝く男を生みつ」。「気色ばみて悩めば」というのは、産気づいて苦しがつての意味で、「たヒらかに」と申しまどう、というのは無事に生まれますように、と必死に神仏に祈ったということです。そうして、玉光る男の子が無事に生まれるわけです。現在でもそうですが、やはり、子どもを産むというのは、かなりリスクなことですので、神仏に祈る、そしてそれを助けるっていうのがやはり必要なことなのだと思います。俊蔭娘は、自覚もなく、妊娠して出産するわけですので、おそらく何にもわかってない人なのだろうと思います。出産が、「暑き頃なれば、貧しき人のためにはいとよし」というのも興味深い点です。

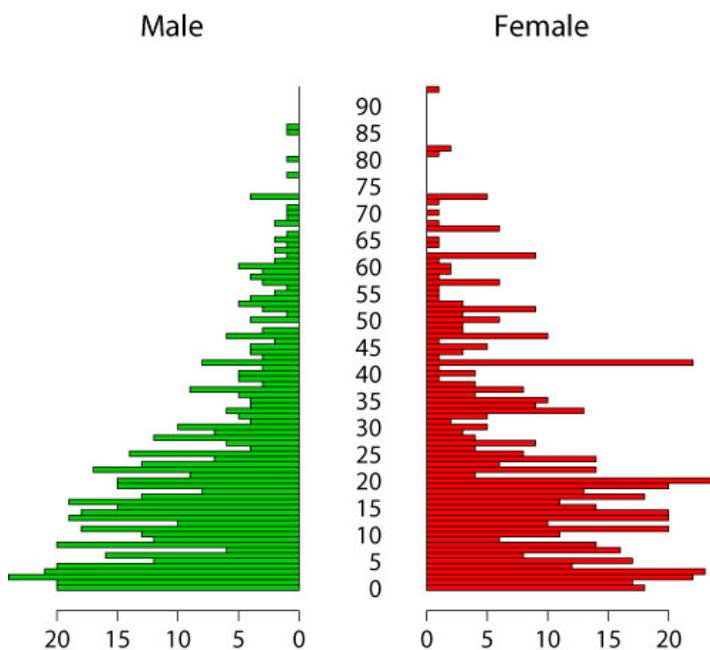
当時の出産に関する面白い資料があるので紹介したいのですが、ちょうど八世紀の初め、奈良時代の戸籍が東大寺の正倉院に遺ってしまして、中でも、現在の岐阜県、昔でいうと美濃国の戸籍がいくつかあります。なかでも加茂郡、今は美濃加茂市ですが、そこに半布里というものがあります。その戸籍が、ほぼ完璧に残っています。その戸籍の

データを元に、人口ピラミッドを描いてみましたが、色々なことが判ってきました。

まず、古代の社会がどのようなものであったかという、この人口ピラミッド見たらわかると思いますけど、裾が広い三角形をしていますよね。これは、みなさんも習ったことがあると思います

が、若年層がいっぱいいる社会、人が次から次に生まれて、人がどんどん死んでいく、そういう、多産多死型の社会です。現在の日本は、出生率がかなり低く、あまり子どもが生まれません。また、生まれた子どもは、あまり死なない、そういう社会です。それに対して、古代社会は、どんどん子どもを産む。その代わりどんどん子どもが死んでく、そういう社会です。

日本の古代社会は、こうした特徴をもつのですが、これを人口統計学の手法で最初に解析したのは、W.W.Farris という方で、次のように言っています。人口のデータは 1000 人当たりで計算するのが通例で、出生率でいくと、半布りの男性の場合 51.7 人、女性の場合は 50.47 人。男性と女性では、結構ずれているのですが、人口ピラミッドを見ていただいたらわかるように、男性のデータと女性のデータは、だいぶ、まちまちです。これは、戸籍をつくる時に、男性と女性の把握に精粗があるからなのですが、女性の把握は、すごくラフなのです。あまりきちっとやってない。古代国家は、男の数をきちんと把握するというのは、古くから行なわれていたらしいのですが、女性の方は付け加



えられたっていう感じです。女性のデータは、かなり怪しいデータで、統計的に検討してみると、男性のデータの方が信頼度は高く、女性のデータの方が信頼度が低いという風になります。このこと自体が日本律令国家を考える大きな鍵でもあるのですが、今回は隣に置いておくことにします。

そして、出生率は以上なのですが、死亡率が 1000 人あたり 1 年にして、35 人死ぬという計算ですので、その足し引き分が人

	半布り		御野総計
	男性	女性	
出生率	57.14	50.47	51.21
死亡率	35.14	36.47	40.21
成長率	22	14	11
平均余命	32.5	28.75	27.75
乳幼児死亡率	61.69	55.48	53.39
平均死亡年齢	38.86	40.57	41.56

W.W.Farris ,Population,Disease,and Land in Early Japan,645-900,Cambridge,Harvard University Press ,1985.

口の増減、この場合はプラスですので、どんどん人が増えていく、というのがファリスの試算です。

また、ファリスの試算によると、半布里の場合、男性の出生時の平均余命は 32.5 歳、女性の場合 28.75 歳となります。私も戸籍の男女混合の生データから、最小二乗法による多項近似曲線の当てはめによって、人口曲線を作って、その人口曲線に基づいて、古代の簡易生命表を計算してみたのですが、0 歳児の平均余命は 28.48 歳になりました。ですので、30 歳前後というファリスの試算とそんなに変わりません。今から 1300 年前の、日本の人たちってというのは、出生時の平均余命が、だいたい三十歳前後になります。現在では、女性はの平均余命は八十歳を超えていますけど、奈良時代では三十歳前後です。出生時の平均余命が。これは、極端に低いと思うかもしれませんが、江戸時代以降の日本では、かなりきめの細かい分析がされていまして、出身階層や地域による違いなども判っているのですが、それでも 30 歳から 40 歳程度です。日本人の出生時の平均余が 50 歳を超えたのは、二十世紀に入ってからです。ですから、奈良時代の出生時の平均余命が 30 歳前後というのは、計算上十分ありえることだろうと思います。

乳幼児の死亡率も、かなりのものに昇るだろうことは、推定できるのですが、これは、はっきりとは判りません。現在ですと、0 歳児と、1 歳児の区別がきちんとつくのですが、古代の場合、年齢は数えですし、戸籍のベースになる計帳は毎年六月に作るので、0 歳児と 1 歳児のデータってというのはきちんと出てきません。ですから、そこは推測によらざるを得ないのですが、出生時の乳幼児死亡率が相当高いことは間違いない。半分近く死んでしまうだろうというのが、ファリスの見通しです。

俊蔭娘には無事に男の子が生まれたわけですけども、神仏の加護が作用したと考えるても不思議ではないですね。出産に伴う危険は普通にあることですので、現在のような医療技術のない段階では、相当リスクなものだったことはまず間違いないと思います。そういう状態で、古代の女性は頻繁に子どもを産んでいるわけです。子どもを産める女性は、次々に産んでゆくのですが、先ほど申しましたように、出生時の平均余命三十歳前後です。古代の女性が何人くらい子どもを産むのかをシミュレーションしてみますと、俊蔭娘のように十代で第一子を出産する、若年多産であったとしても圧倒的大部分は、一人か二人の子どもを産んで死んで本人も死ぬ。中には、長生きした女性の場合、十人～十一人の子を産んだ人もいましたが、滅多にいないです。またそうした子どもも次から次へと死んでゆきました。

#### 4. 俊蔭娘と子—母子の困窮—

もういっぺん宇津保に戻ろうと思います。俊蔭娘には子どもが生まれるのですが、そこから試練が始まります。

【9】かゝるほどに、この子五つになる年、秋つかた姫死ぬ。この親子、いさゝか

物食ふことも無くなりぬ。日を経て徒然とあり。この子、出で入り遊び歩いて見るに、母のものも食はで有ルを見て、いみじう悲しとみて、「いかで、これ養はん」と思ふ心つきて思へど、さる幼きほどなれば、なでフ業をもえ為ず。つとめて、近き河原に出でて遊びありけば、釣する者、魚を釣る。「何に為むとするぞ」といふに、「親のわづらひて、物も食はねば、たばむずるぞ」といふに、「さは、親には、これを食はするぞ」と知りて、針をかまへて釣るに、いとヲカしげなる子の、大いなる川づらに出でてすれば、「かく、らうたげなる子を、かく出だし歩りかする、誰ならん」と思ひて、「なに為むに、かくはするぞ」といへば、「遊にせんずる」といふ。らうたがりて「我釣りて取らせむ」とて、多く釣りてとらする人もあるを、持て来て、親に食はせなどし歩くを、「かく、な為そ。物食はぬも、苦ウもあらず」といへど、聞かず。容貌は日々に光るやうになり行く。見る人、抱きうつくしみて、「親は有りや。いざ、我が子に」といへば、「いな、おもとオはす」トイヒて、さらに聞かず。日の暖かなるほどは、かく、し歩いて、母に食はす。夢ばかりにても、唯子の食はする物にかゝりてあり。

何とか子どもが生まれて、無事に育ち始めたわけですけれども、なかなかドラマティックに物語は続きます。「かゝるほどに、この子五つになる年、秋つかた姫死ぬ」。世話をしていた老女が死にます。そうすると、「この親子、いさゝか物食ふことも無くなりぬ」。俊蔭娘の子が5つになった年の秋に、老女が亡くなったところ、この母子は、少しも食ふことができなくなった。それで、「日を経て徒然とあり」、日々徒然と暮らしていたわけです。

そして、「この子、出で入り遊び歩いて見るに、母のものも食はで有ルを見て、いみじう悲しとみて『いかで、これ養はん』」と思ふ心つきて、思へど、さる幼きほどなれば、なでフ業をもえ為ず。俊蔭娘の子が、家を出入りして遊びまわりながら見てみると、母は何も食べないでいるので、それを見て、たいそう悲しい思いをした。「いかで、これ養はん」、どうやって、なんとかして母を養ってあげようと、「と思ふ心つきて」、そういう気持ちになって、思いめぐらしてみるのが、このような、「幼きほどなれば」、子どもなので、どうしようもなかった。

それで、「つとめて、近き河原に出でて遊びありけば、釣する者、魚を釣る」、「近き河原に出でて」、朝早く、「近き」、近所の河原に出で遊んでいると、釣り人が魚を釣っている。「何に為むとするぞ」と尋ねたところ、釣り人が言うには、「親のわづらひて、物も食はねば、たばむずるぞ」とのこと、で、「さは、親には、これを食はするぞ」と知りて、それで親には魚を食べさせるのか、と悟った。そこで、釣り針を用意して魚を釣っていたところ、「いとヲカしげなる」、たいそう可愛らしい子が、「大いなる川づらに出でて」、大きな川のほとりに出て、釣りをしているので、「かく、らうたげなる子を、かく出だしありかする、誰ならん」と思ひて「なに為むに、かくはするぞ」、こんな可

愛い子をこうして出歩かせているのはどこの親だ、と思って、何のために釣りをしてるのだ、という風に聞く人がいた。俊蔭娘の子は、「遊にせんずる」と答える。そのため、大人は俊蔭娘の子を「らうたがりて」、可愛がって、人々が可愛がって、「我釣りて取らせむ」、じゃあわたしが釣ってあげようと言って、「多く釣りてとらする人」があり、そうして釣り上げた魚を「持て来て、親に食はせなどし歩」いた。

母は、「かく、な為そ。物食はぬも、苦ウもあらず」と言うのですが、子は聞かなかった。その子の「容貌は日々に光るやうになり行く」、日ごとに輝くような、美しい少年になっていった。それで、その子を「見る人、抱きうつくしみて」、抱いたり可愛がったりして、「親は有りや。いざ、我が子に」、親はいるのか、わたしの子にならないか、と言った。このへんも面白いですよ。当時の出生時の平均余命の短さなどを考えると、親のいない子というのは、普通にいたと思われます。親と子の結合も脆いもので流動性が高かったのですが、そうした時、親のいない子がどのように扶養されたのかヒントになるかもしれません。もっとも、この場合、俊蔭娘の子は、「否」、「おもとオはす」、母がいます、と言って聞き入れないのですが。こうして暖かい季節は、魚釣りをして、母に食べさせた、とあります。

そして冬になって魚釣りができなくなり、奇瑞により食料を調達するなどの話が続きますが、そこは省略します。

【10】 かゝるほどに年かへりぬ。この子、まして大きに、敏く賢し。変化のものなれば、たゞ大人のやうになりて、人に見ゆれば、「たが子ぞ。親は誰とかいふ。このわたりにあるなるべし」などいひて、求むれば、オのづから尋ねも来ぬべし。かく歩きて、人にも見え知られじ。この河にのみやは魚は有ルと思ひて、下りてその河より渡りて、北ざまに指して行きて、山に入りてみれば、大いなる童、土を掘りて、物を取り出でて、火を焚きて、焼きあつめて、又、おほいなる木の下に行きて、椎、栗などをとりて、この子ニイフヤウ、「何しに、この山には有ルぞ」と問へば、「魚釣りに来つるぞ。御許に食ハせ奉らんとて」トいへば、「山には魚はなし。又、生きたるもの殺すは罪ぞ。これを拾ひて食へ」と教へて、この掘り拾ひ集めたる物どもを取らせて、童は失せぬ。この子、「うれし」と思ひて、持ていきて、母に食はす。この後は、山に入りて、見せ知らせし薯蕷、野老を掘りて、木の実、葛の根を掘りて、養ふ。雪高う降る日、薯蕷、野老のあり所も、木の実の有リ所モ、見えぬときに、この子、「わが身不孝ノ子ならば、この雪たかく降りまされ」といふ時に、いみじう高く降る雪、たちまちに降り止みて、日いとうらゝかに照りて、ありし童いで来て、例の薯蕷、野老、焼き調じて、取らせて失せぬ。

ここからです、いよいよ貧窮している母子が、どうやって過ごしていったか。「かゝるほどに年かへりぬ」。そうこうしているうちに年が改まった。「この子、まして大きに、

敏く賢し」、この子はますます大きく成長して、聡明で優れている。その子は、「変化のものなれば、たゞ大人のやうになりて、人に見ゆれば」、耳目を引くのでしょうね、「たが子ぞ。親は誰とかいふ。このわたりにあるなるべし」などいひて、素性が詮索されます。誰の子だ、親はなんていうのか、この辺に住んでいるのか、といちいち詮索されるので、うっとおしい。「かく歩きて、人にも見え知られじ」、ということで、もう、このように歩き回って、人に見られたり知られたくない。

そこで、「この河にのみやは魚は有ルと思ひて、下りてその河より渡りて、北さまに指して行」く、この河にだけに魚がいるわけでもないだろうと思って、河原に下りて、その河を渡って北の方を目指していった。要するに山に行ったわけです。それで、「山に入りてみれば、大いなる童、土を掘りて、物を取り出でて、火を焚きて、焼きあつめて、又、おほいなる木の下にいきて、椎、いちヒ、栗などをとりて、この子ニイフヤウ」、それで北の方に、山に行ってみると、大柄な子どもがいた。「童」っていうのは、年八歳から婚姻するまでの年齢をさします。この場合は十五歳以下の少年です。俊蔭娘の子よりも年上です。この童が、山で土を掘って何かを取り出して、火を焚いて焼き集めている。

また、大きな木の下で、椎の実や栗などを拾って、この子に向かって、「何しに、この山には有ルぞ」、何しにこの山に入ってきたのか、と聞くので、『魚釣りに来つるぞ。御許に食クハせ奉らんとて』、母に食べさせるために、魚釣りに来たんだ、と言え、  
「山には魚はなし。又、生きたるもの殺すは罪ぞ。これを拾ひて食へ」と教へて、「このほりひろひあつめたる物どもを取らせて、童は失せぬ」、その童は消え失せる。そして、「この子、『うれし』と思ひて、持ていきて、母に食はず」、嬉しくなって持って帰ってそれを母に食べさせたわけです。

それから、「この後は山に入りて、見せ知らせし薯蕷」、その次は「野老」って書いてありますよね、これをトコロと読みます。これはいずれも、芋、山芋です。これを「掘りて、木の実、葛の根を掘りて、養ふ」。山に入って、その少年から教わった、芋や野老を掘って、木の実を拾って、葛の根を掘って、母を養った。山で、こういうものを拾って、それを食べる、そういう生活になってゆきました。

そして、「雪高う降る日、薯蕷、野老のあり所も、木の実の有り所モ、見えぬとき」があったのですが、「この子、わが身不孝ノ子ならば」、要するに孝行じゃない、不孝の子であるならば、「この雪たかく降りませ」と言くと、「いみじう高く降る雪、たちまちに降り止みて、日いとうらゝかに照り」だした。そして、「ありし童いで来て、例の薯蕷、野老、焼き調じて、取らせて失せぬ」、という不思議なこともおきます。

今日の最後ですが、

【11】　かく遥かなる程をし歩くも、苦しうおぼえて、「いかで、この山に然るべき所もがな。近くてやしなはん」と思ひて、山深く入りて見れば、いみじう厳めしき杉の木四つ、ものをあはせたるやうにて立てるが、大きな屋

のほどニ、あきあひて有ルを見て、この子の思ふやう、「こゝにわが親を据エたてまつりて、拾ひ出でん木の実をも、先づま申らせばや」と思ひて、寄りテ見るに、厳めしき牝熊、牡熊、子を生みつれて、棲むうつほなりけり。出で走りて、この子を食まむとする時に、この子のいはく、「しばし待ち給へ。まろが命絶ち給フな。まろは孝の子なり。親はらからもなく、使フ人もなくて、荒れたる家に唯ひとり住みて、まろが参る物にかゝり給へる母ヲ持ちたてまつれり。里にはすべき方もなければ、かゝる山の木の実、葛の根を採りて、親にま申ラスるなり。高き山、深き谷を下り上り、罷り歩いて、朝にまかり出でて、暗うまかり帰る程だに、うしろめたう、悲しく侍れば、かゝる山の王棲ミ給フとも知らで、この木のうつほに母を据エたてまつりて、薯蕷、ひとすぢを掘りいでてモ、まづま申らせむ。又、遠き道をも、親のためにと、まかり歩きければ、苦しうもおぼえねど、つれづれと待ち給フらんも悲しう侍れば、近くとおもウ給へテ、見侍りつるなり。されど、かく領じ給ヒける所なれば、まかり去りぬ。空しく成りなば、親もいたづらになり給ヒなん。己のが身のうちに、親をやしなはむに、用なき所あらば施し奉るべし。足なくば、いづくにてか歩りかん。手なくば、何にてか木の実、葛の根をも掘らん。口なくば、いづこよりか魂通はむ。腹、胸なくば、いづくにか心のあらむ。この中ニ、いたづらなる所は、耳のはた、鼻のみねなりけり。これを山の王に施し奉る」と、涙をながしていふときに、牝熊、牡熊、荒き心を失ひて、涙を落して、親子のかなしさをしりて、二ツの熊、子供を引き連れて、この木のうつほを、この子に譲りて、他峯に移りぬ。

「かく遙かなる程をしありくも、苦しうおぼえて『いかで、この山に然るべき所もがな。近くてやしなはん』」、このように、遠くまで来て、食べものを求めるのも辛い。どうかして、この山に住めそうなところがないものか、どうせなら母上を近くに置いて養いたい。そう思って、「山深く入りて見れば、いみじう厳めしき杉の木四つ、ものをあはせたるやうにて立てるが、大きな屋のほどニ、あきあひて有ル」、山深く入って探していると、非常に大きな杉の木が四本あって、物をあわせたように立っており、大きな建物のような空間になっている。それを見て、この子は、「こゝにわが親を据エたてまつりて、拾ひ出でん木の実をも、先づま申らせばや」と思ひて、近寄ってみると、そこは、厳めしき牝熊・牡熊が、子を生みつれて、棲んでいる木のうつほであった。要するに、熊の棲みかだだった。山に母を住ませようと思って、適当なところはなかと探してみると、木の根っこにちょうど空洞になっているところがあった。こうした空洞が「うつほ」で、ここから『宇津保物語』という名前が付けられます。それを覗いてみると、なんとそこには、熊が棲んでいた。

それで、熊が、なんだこいつってことで、「出で走りて、この子を食まむとする」、食い殺そうとするのですが、俊蔭娘の子は「しばし待ち給へ。まろが命絶ち給フな。まろ

は孝の子なり。親はらからもなく、使フ人もなくて、荒れたる家に唯ひとり住みて、まろが参る物にかゝり給へる母ヲ持ちたてまつれり」と熊に訴えます。わたしは孝行な者です。親や親族もなく、また使用人もいません。荒れ果てた家にただ一人住んで、私がさし上げる食べ物を頼りにする母がいます。そして、「里にはすべき方もなければ」、里では生活する方法もないので、「かゝる山の木の实、葛の根を採りて、親にま申ラスるなり」、このような山の木の实や、葛の根を採って、母に差し上げているのです。里と山ってというのは対の概念です。都、里、山という順で異界の世界になってゆきます。でするので、山の世界というのは、熊の棲んでいる世界です。

それで、母を養うために、「高き山、深き谷をおりのぼり、罷りありきて、朝にまかり出でて、くらうまかり帰る程だに、うしろめたう、悲しく侍れば」、高い山や深い谷を登ったり下りたりして歩き回って、朝早く家を出て夕方暗くなって帰るのですが、その間も母のことは心配です。「うしろめたう、悲しく侍れば」っていうのは心配ですっていうこと。

このような「山の王、棲ミ給フとも知らで、この木のうつほに母を据エたてまつりて、薯蕷、ひとすぢを掘りいでてモ、まづま申らせむ」、このような山の王者がお棲まいになっているとも知らないで、この木のうつほに母を住まわせて、そういう、山で採れたものを差し上げようと思ったのです。そして、また、「遠き道をも、親のためにと、まかりありけば、苦しうもおぼえねど」、その間、母が「つれと待ち給フらんと、悲しう侍れば」、「近く、とおもウ給へテ見侍りつるなり」、近くに住ませたいと思ってこのうつほを見たのです。だけど、「かく領じ給ヒける所」、領じ給うの領は支配するの意で、この場合は、山の王である熊が支配されている所であるならば、帰ります、となります。

ここで、「空しく成りなば」、空しいっていうのは死んでしまうっていうことです。空しくなる、いたづらになるっていうのは死ぬということです。ここで私が死んでしまえば、「親もいたづらになり給ヒなん」、母も死んでしまうでしょう。「己のが身のうちに、親をやしなはむに、用なき所あらば施し奉るべし」、ということで、親を養うのに必要ないところであるならば奉りましょう。しかし、もし「足なくば、いづくにてかありかん」、どこに歩いてゆけるでしょうか。また、もし「手なくば、何にてか木の实、葛の根をも掘らん」、木の实を採ったり葛の根を掘ることもできません。そして、「口なくば、いづこよりか魂通はむ」、心を通わしたり、気持ちを伝えることもできなくなってしまいます。さらに、「腹、胸なくば、いづくにか心のあらむ」、心は腹、胸にあると考えていたのですね。「この中ニ、いたづらなる所は」、無駄なところは、「耳のはた」、耳をあげます。「鼻のみねなり」、鼻もいりません。鼻と耳は熊に差し上げますから、「これを山の王に施し奉る」と、「涙をながして」言ったわけです。

そうすると、「牝熊・牡熊、荒き心を失ひて、涙を落して、親子のかなしさをしりて」、二ツの熊は子熊を引き連れて、「この木のうつほを、この子に譲りて、他峯に移りぬ」となったわけです。なんと親孝行な息子だ、と熊が感心して、じゃあわたしたちが出て

行きますと言って出て行った。それで俊蔭娘とその子は、このうつほに住むことになった、というのが、『宇津保物語』俊蔭のあらすじです。

## 5. 古代の家族、貧困、飢餓

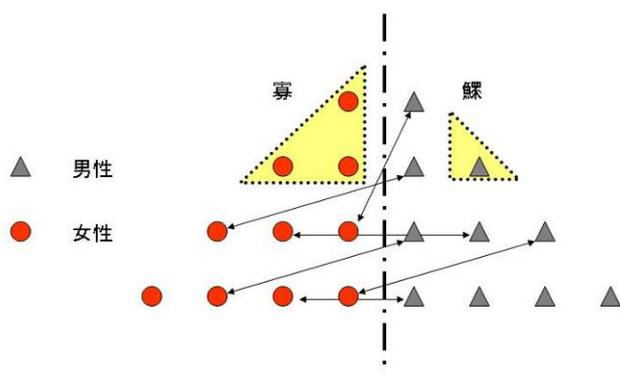
以上の話のポイントは二つあります。一つは、古代の、いわば母子家庭の問題。もう一つは貧窮の問題です。まず、前者についてですが、この場合、母と子の頼りとする人のいない、弱小家族の物語になっています。この母子が困窮して山に入るという話なのですが、古代社会では、出生時の平均余命三十歳前後ですので、子どもが生まれたとしても、その子どもを両親がずっと育て上げるなんていう、現代の単婚小家族のような生活は、ほとんどありえない。父が死んでしまう、母が死んでしまう、子どもが死んでしまうなんていうのは、普通にあることです。そういう流動性の高い社会です。ひとりっきりの子ども、親がいなくなった子ども、それからお父さんがなくなった、母と子の生活、こうした破片的な家族というのは、古代社会では多く発生していました。

当時は安定的な単婚小家族があって、両親が仲良く子どもを育て、それが、代々連なっていくというものではなかった。夫婦の問題でも、配偶者との死別が頻発しているわけですが、ちょっとこれを見てほしいのですが、面白い現象があります。古代の戸籍で妻と夫の年齢差を集計したものです。半布里の戸籍でみた事例ですけど、十代のカップルというのは、あまり年齢差は開いてない。例えば、十代の場合、夫を基準にすると妻は夫よりだいたい 1.33 歳若い。ところが、三十代の場合には夫と妻の年齢差は 5.28 歳に広がる。五十代では 9.53 歳、八十代になると 12.50 歳になります。これは、どういうことかっていうと、例えばみなさんなんていうと、同級生のカップルがいたとして、それが齢を重ねていって、二人がおじいさん、おばあさんになったとしても、二人とも生きていれば年齢差は開かないですよ。ところが、古代のデータでは、年齢が上がれば上がるほど、夫と妻の年齢差が開くのです。

これは、どういうことかという、相手が死んだら、若い人と結婚する、そういう現象

が起きているのです。『日本霊異記』中巻「孤の嬢女、観音の銅像に憑り敬ひ、奇しき表を示して、現報を得る縁 第卅四」には、奈良の殖槻寺の側に住んでいた、一人きりになった、孤の嬢の事例がみえますが、この場合、「妻死にて鰥」の「里に富める者」に求婚されるように、妻と死別したら、次の妻をとい

### 対偶関係概念図



年代	半布里						西海道	
	夫	例数	戸主	例数	非戸主	例数	夫	例数
80	12.50	2	12.50	2	-	-	12.00	1
70	12.29	7	14.40	5	7.00	2	31.00	3
60	9.53	15	10.18	11	7.75	4	8.29	9
50	7.22	27	6.00	14	8.54	13	7.91	22
40	6.40	25	4.86	7	7.00	18	7.50	34
30	5.28	25	4.75	4	5.38	21	5.88	33
20	3.76	17	1.00	2	4.13	15	3.60	15
10	1.33	3	-	-	1.33	3	-	-

- ・ 夫が10代の場合、妻との年齢差が平均で1.33歳
- ・ 夫が70代の場合、妻との年齢差が平均で12.29歳
- ・ 妾は除外
- ・ 推定1例を含む

うのが普通のことでした。女性の場合もそうでして、夫が死んだら、誰か他に頼りになる男を探すというのが、普通のことでした。実際に、六十代・七十代の男女で配偶者の有無を比較してみると、妻のいない男性というのは少なく、夫のいない女性ばかりで

す。男の場合、生き延びた男性はですね再婚している事例が多いのに対し、ある一定の年齢ぐらいになるとですね、女性が再婚の対象から外れる、外されてくというですね、そういう現象が起きている。だから、対偶関係っていうのは再構成されるのですが、男女が対称的に再構成されるわけではなくて、生き延びた男性を軸にして、世帯が再構成されるっていうのが、古代の基本的なあり方なんです。だから、年齢が上になればなる程、妻との年齢差が開いてくってということですね、そういう現象が起きている。こうやってなんらかの形で、家族関係を再構成して行って、頼る人を得て、それで寄り添って生活していくってのがですね、古代の基本的な条件のひとつですね。

もう一つ、大事なポイントがあるのですが、そういう破片的な家族の生活についてですが、この場合は、里で住むことができなくなって、つまり、都や里で住むことができなくなって、山へ行ってうつほに住むわけです。実は、里で食べられない時に、山に入るといのは、飢饉の際の普遍的な現象でした。

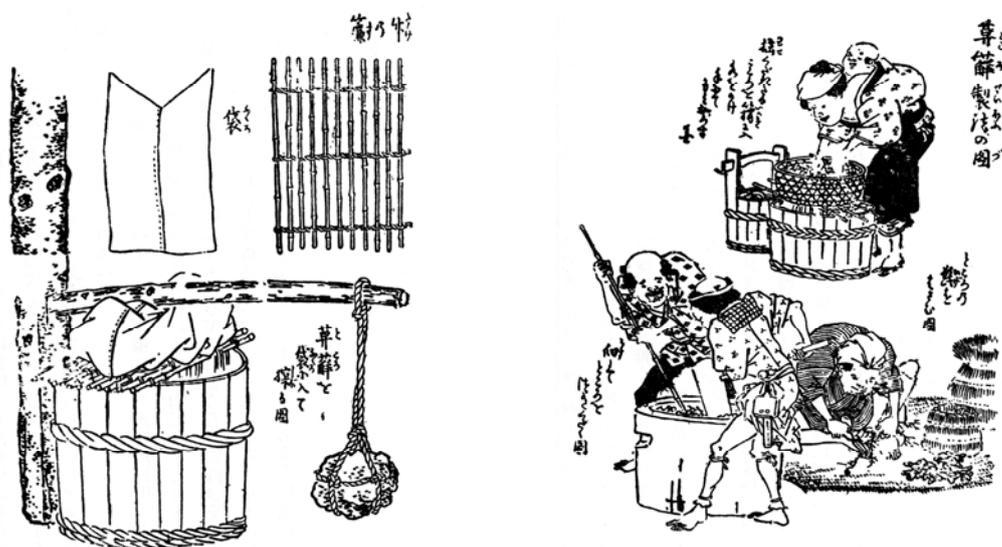
これは中世後期が慢性的な飢饉状態であったことが明らかにされていますが、その際の死亡事例では、春から夏の食料の端境期に人が多く死んでいます。古代でも状況はほぼ同様で、毎年、夏になると必ず飢饉がありました。飢饉が起きると何が起こるかという、まず、悪食が流行ります。そして栄養状態が悪くなりますので、容易に伝染病などに罹り、色々な疾患が生じます。夏になって飢饉が起きると、当然のことながら疫病も流行ることになります。

古代は、こういう飢饉や疫病が身近な社会でした。実際に、奈良時代の死亡のデータ見てみますと、天平十一年の事例では、五月に最も多く人が死んでいます。前に述べたように、一月から三月が春で、四月から六月が夏ですので、五月というのは、夏の中の夏です。それから、『続日本紀』という八世紀の歴史書があるのですが、その中で飢饉の発生記事をみると、これも、だいたい三月・四月にピークを迎えています。この場合も、春から夏にかけてまあ飢饉が発生することを示しています。古代は、慢性的な飢饉の状態、そういう生存条件のかなり厳しい社会でした。

そして、飢饉や疫病が起きるとどうなるかという、まさに、うつほでの生活がそれにあたります。里で、食べるものがなくなったら、人はどこに行くかという、山に入

るのです。山に入れば、薯蕷や野老があります。この他、山の動物なども食べたでしょう。昭和初期に東北地方は飢饉に見舞われますが、この時も同じで、老若男女が山に入り、飢えをしのいでいます。今回の話は、平安貴族のものですが、身をやつして山に入るといのは、そういう飢饉のときの人々の生活を描いているものです。『宇津保物語』の俊蔭娘と子の生活は、困窮して飢饉にあっているのと同じ、悲惨な状態を描いているわけです。

古代の人口変動については、まだ正確にそれをプロットすることはできませんが、例えば貞観八年・九年の隠岐国では、疫病により人口が三割から五割減少した可能性があり、大規模災害で相当の人口減に見舞われたことは確実です。もとよりこれだけの被害が列島全体を覆うわけではなく、全体を見た場合には、変動の幅は小さくなるかもしれませんが、個々の局面では大変動が起きていたことは間違いありません。古代社会は決して、牧歌的な農耕社会ではなく、厳しい生存条件のもとで流動性高い過酷な社会だったのです。



大蔵永常『広益国産考』（岩波文庫、1946年）

岡山大学教養総合科目「ジェンダーと生きることー働く未来にむけてー」（2009. 5. 28）  
講義を収録

平成 19 年度～平成 21 年度科学研究費補助金（基盤研究（C） 課題番号 19520574）研究成果報告書  
時空間情報科学を利用した古代災害史の研究

平成 19 年度～平成 21 年度科学研究費補助金（基盤研究（C） 課題番号 19520574）  
研究成果報告書

## 時空間情報科学を利用した古代災害史の研究

---

2010 年 3 月

編集・発行

代表者 今津勝紀

岡山大学大学院社会文化科学研究科

〒700-8530 岡山市北区津島中 3-1-1

印刷・製本

広和印刷株式会社

〒700-0942 岡山市豊成 3 丁目 18-7

---